

血液型ステレオタイプの変容

— 男女大学生を対象とした上瀬・松井（1996）の追試 —

Changing stereotypes related to blood-groups in men and women undergraduates as a follow-up to the previous study by Uese and Matsui(1996)

天谷 祐子

Yuko AMAYA

キーワード：血液型，ステレオタイプ，講義

Key words : blood-group, stereotype, lecture

要約

本研究では、上瀬・松井（1996）による女子大学生を対象とした血液型ステレオタイプが講義により変容する過程を示した手続きに沿って、男女大学生を対象に同様の手続きを行い、変容の過程に関して、男女を含めた検討と上瀬・松井（1996）の結果との比較検討を行った。私立男女大学生 227 名（男性 97 名、女性 130 名）を対象として、血液型ステレオタイプに対する態度尺度を実施後、血液型ステレオタイプに関する講義を行った。その後血液型ステレオタイプに対する態度尺度の一部と血液型ステレオタイプに対する講義後態度尺度を実施した。その結果、講義前の時点では「自己理解」、「信念強度」、「行動調整」において男性より女性の方がより高かった。また講義前から講義後にかけての「信念強度」得点は、上瀬・松井（1996）の女子のみの結果と同様、男女ともに有意に低下していることが示された。さらに講義後において、講義で伝達した反ステレオタイプ情報をサブタイプとして処理する「サブタイプ形成」がより見られた者は、そうでない者に比べ、講義前の段階で血液型ステレオタイプに対する態度の得点が総じて高かった。そしてサブタイプ形成群は非形成群に比べて、講義後の「信念強度」得点の上がり方が小さかった。上瀬・松井（1996）の結果と同様に、サブタイプ形成はステレオタイプ維持機能として働いていることが支持された。

Abstract

This study, a follow-up to the work of Uese and Matsui (1996), used the same procedure but added men as participants. Its aims were (a) to examine the combined results of men and women challenged to change their stereotypes of blood-groups, and (b) to compare these results with those of Uese and Matsui (1996). 227 male and female undergraduates participated. Participants first responded to questionnaires about blood-group stereotypes. Then they attended a lecture by the author discrediting blood-group

stereotypes. Finally, the participants again responded to the part of the original questionnaire dealing with “strength of belief” and to the scale on attitudes toward blood-group stereotypes. The results were as follows: (1) Before the lecture, the women’s scores on “self-understanding,” “strength of belief,” and “regulation of behavior” by blood-group stereotype were higher than the men’s scores. (2) After the lecture, both men’s and women’s scores on “strength of belief” were significantly lower than before the lecture, an outcome similar to that found by Uese and Matsui (1996). (3) After the lecture, the group that accepted the information discrediting the stereotype consisted of students who originally got higher scores on blood-group stereotypes than the group not accepting the information. As to the decline of the score related to “strength of belief” from before to after the lecture, the group that accepted the information was significantly smaller than the group that did not.

問題と目的

心理学において、血液型と性格の関連については否定されている。しかし、日本においては血液型と性格については日常的な会話の中に取り入れられたり、テレビや雑誌のテーマとして取り上げられたりすることが非常に多い。佐藤(1997)は「現代の日本では、血液型によって人の性格や相性を考えることがごくあたりまえに行われて」いることを指摘している。

このような現代の日本の（特に学生・生徒の間における）血液型と性格に対する考え方を受けて、心理学では、性格心理学における両者の関連の否定（例えば、詫摩・松井, 1985）、「なぜ一般人の人に受容されるのか」といった社会心理学的観点からの研究、特にステレオタイプに関する研究（例えば上瀬・松井, 1996）が展開されている。また、認知の歪み（例えば森・徳井・山田・坂元, 1998；樫淵・齋田・坂元, 1999）、歴史的展開（例えば佐藤・渡邊, 1995）といった領域からの研究も行われている。

その中で、本研究では、2008年現在の大学生が血液型と性格の関連についてどのように捉えているか、また心理学において両者の関連が否定されているという情報を大学生に講義において与えることで、どのような態度変容が見られるか、もしくは見られないかといった教育的な視点から実証的に検討する。そのために、上瀬・松井(1996)による血液型ステレオタイプの講義による態度変容の知見に沿って同様の手続きを踏み、そのプロセスを実証的に検討する。また上瀬・松井(1996)による研究は女子大学生のみが調査対象者となっているが、男子大学生も含めて一般的な現代の大学生の捉え方を調べることも目的とする。

方 法

調査対象者

大学生 227 名（男性 97 名、女性 130 名）であった。

質問紙

(a) 血液型ステレオタイプに対する態度尺度：上瀬・松井（1996）が作成した 5 因子 19 項目のうち、因子 2「感情」の 4 項目を省く 4 因子「自己理解」4 項目、「娯楽・関係促進」4 項目、「信念強度」3 項目、「行動調整」4 項目、計 15 項目を使用した。「あてはまる」（5 点）、「ややあてはまる」（4 点）、「どちらともいえない」（3 点）、「ややあてはまらない」（2 点）、「あてはまらない」（1 点）の 5 件法で尋ねた。

(b) 血液型ステレオタイプに対する講義後態度構造尺度：上瀬・松井(1996)が作成した 5 因子 20 項目のうち、上瀬・松井（1996）の研究による肯定率が 3%以下であった 2 項目、2 因子にまたがって寄与している項目 3 項目、その他 1 項目の計 6 項目を省く 5 因子「不可知性」4 項目、「サブタイプ」4 項目、「経験的根拠」2 項目、「遊び」2 項目、「意味づけ」2 項目の計 14 項目を使用した。「そう思う」（5 点）、「ややそう思う」（4 点）、「どちらともいえない」（3 点）、「あまりそう思わない」（2 点）、「そう思わない」（1 点）の 5 件法で尋ねた。

質問紙構成

1. 第 1 時点（講義前）の質問紙

前述（a）血液型ステレオタイプに対する態度尺度に回答を求めた。

2. 第 2 時点（講義後）の質問紙

前述（b）血液型ステレオタイプに対する講義後態度構造尺度と（a）血液型ステレオタイプに対する態度尺度のうち「信念強度」因子 3 項目に回答を求めた。

手続き

大学講義室において、講義前に回答者が一斉に質問紙（第 1 時点）に回答した後、血液型ステレオタイプを否定する内容の講義を受けた。講義後、回答者は質問紙（第 2 時点）に回答した。講義は調査者（著者）自身が行った。

講義内容については、上瀬・松井(1996)では以下の 5 点が見られた。(1)血液型研究の歴史、(2)詫摩・松井(1985)の研究紹介（ステレオタイプの中身の曖昧性）、(3)サンプリング調査によるステレオタイプの否定（松井，1991）、(4)大村(1984)による研究紹介（フリーサイズ効果、ラベリング効果）、(5)血液型ステレオタイプの問題点であった。本研究における講義では、そのうち 2 点（上瀬・松井(1996)における(3)、(4)）について部分的に取りあげて講義が行われた。つまり（1）松井(1991)による研究結果に基づく尺度の実施（上瀬・松井，1996 における(3)）、（2）大村(1990)によるラベリング効果（上瀬・松井，1996 における(4)）の 2 点に加えて、（3）誰にでもあてはまりやすい傾向が性格特徴として取り上げられていること（渋谷・小野寺，2006 に

よる)、(4)佐藤(1997)による確率的観点からの議論を、本研究における講義内容として実施した。

結 果

1. 講義前(第1時点)における結果

1-1. 血液型ステレオタイプに対する肯定率

(a) 本研究における全体の肯定率と性別による肯定率

血液型ステレオタイプに対する態度尺度における各項目の肯定率を算出した (Table1 参照)。肯定率とは、各項目において5段階中「4」と「5」に回答した人の全体に占める割合を示している。肯定率が半数を越えている項目は、「血液型性格判断は楽しい」(65.2%)、「血液型によって性格は異なる」(57.3%)の2項目であった。

また性による肯定率の相違を検討するために、性別の肯定率も算出した (Table1 参照)。その結果、総じて女子の肯定率が男子よりも高い傾向が見られ、男子の肯定率が女子と同等もしくは女子より高い項目は少数にとどまった。なお本研究では性別の調査対象者の人数を確保するため、欠損値の見られる調査対象者についても分析対象とした。したがって、分析によって対象人数が異なっている (以後の分析も同様)。

(b) 本研究の結果と上瀬・松井(1996)による結果の比較

本研究における肯定率と上瀬・松井(1996)による肯定率の比較を行うために、肯定率(%)を度数に置き換えて、各項目について、両研究における調査対象者の肯定した人の人数と否定した人の人数に関するカイ二乗検定を行った。まず、本研究における女子の肯定/否定の人数と、女子大学生のみを対象とした上瀬・松井(1996)による結果についてカイ二乗検定を行った。その結果 (Table 1 参照)、15項目中8項目について有意差が見られた。本研究における肯定者が上瀬・松井(1996)の肯定者よりも多かったのは「自分を知るのに役立つ」、「知らない自分が分かる」、「自己について新しい発見をする」といった「自己理解」因子4項目のうちの3項目、「血液型によって行動を変える」、「他者行動の理解に役立つ」といった「行動調整」因子4項目のうちの2項目であった。一方、本研究における肯定者が上瀬・松井(1996)の肯定者よりも少なかったのは「初対面時に役立つ」、「血液型性格判断は信用できる」、「血液型性格判断は当たっている」の3項目であった。

次に、本研究における男女込みの肯定/否定の人数と、上瀬・松井(1996)による結果についてカイ二乗検定を行った。その結果 (Table 1 参照)、15項目中7項目について有意差が見られた。女子同士の比較の際に有意差の見られた項目と共通しているのは、そのうち5項目であった。「血液型性格判断が好き」、「血液型によって性格は異なる」の2項目については、本研究の肯定者が上瀬・松井(1996)よりも有意に少なかった。

Table 1 血液型ステレオタイプに対する態度尺度の肯定率とカイ二乗検定結果と因子分析結果

	上瀬・松井(1996)による肯定率(%) (全体、%)	本研究における肯定率(男子、%)	本研究における肯定率(女子、%)	上瀬ら(1996女子)と本研究女子のみにおける肯定率を人数に置き換えたカイ2乗検定結果	上瀬ら(1996女子)と本研究の男女込みの肯定率を人数に置き換えたカイ2乗検定結果	因子 I 自己理解	因子 II 娯楽/関係促進	因子 III 信念強度	因子 IV 行動調整	因子 V 共通性
自分を知らぬのに役立つ	26.0	36.6	27.1	44.5 **	本研究 > 上瀬ら	.32	.63	.12	-.17	.76
知らない自分かわかる	12.5	26.4	22.9	29.2 **	本研究 > 上瀬ら	-.06	.97	-.08	.00	.77
自己について新しい発見をする	16.4	24.7	19.6	28.5 *	本研究 > 上瀬ら	-.05	.94	-.06	-.03	.74
自己を客観的に見られる	26.0	29.9	23.7	34.6		.05	.53	.05	.07	.41
血液型性格判断は楽しい	83.6	65.2	56.3	72.3		.99	-.11	-.09	-.03	.74
血液型性格判断が好き	61.5	49.8	43.3	54.6	** 本研究 < 上瀬ら	.84	.01	.01	.00	.73
コミュニケーションに役立つ	40.4	33.5	34.4	33.1		.13	-.10	-.15	.84	.60
初対面時に役立つ	26.0	22.9	25.8	20.9 **	本研究 < 上瀬ら	-.17	.02	.17	.65	.47
血液型によって性格は異なる	71.6	57.3	49.5	63.1	** 本研究 < 上瀬ら	.64	-.07	.10	.02	.44
血液型性格判断は信用できる	37.5	17.1	13.7	20.2 **	本研究 < 上瀬ら	.59	.18	.14	-.01	.66
血液型性格判断は当たっている	53.8	31.2	22.7	38.3 *	本研究 < 上瀬ら	.52	.24	-.09	.15	.57
血液型を考慮してから対人行動をする	5.8	13.2	14.4	12.3		.05	-.13	1.06	-.14	.89
血液型によって行動を変える	4.9	9.2	9.3	9.2 ***	本研究 > 上瀬ら	-.10	.09	.68	.13	.59
他者行動の理解に役立つ	14.4	28.6	22.7	33.1 **	本研究 > 上瀬ら	.10	.19	.16	.48	.62
血液型でまず相性を考える	26.9	18.0	12.4	22.3		.07	.03	.50	.17	.46
					α 係数	.87	.73	.81	.82	
					累積寄与率	63.00				

注 1. この項目の並べ方は、上瀬・松井(1996)の因子の順序である。従って、本研究における因子分析結果から得られた因子の順序・まとりとは異なる。

注 2. カイ二乗検定は、各項目について、5段階のうち「5」「4」を選択した人数とそれ以外の人数を、本研究と上瀬ら(1996)の結果からクロス集計表として作成し、期待値よりも有意に多いか否かを 2 研究の肯定率について検討した。本研究の肯定率が期待値よりも有意に多く、かつ上瀬ら(1996)の肯定率が期待値よりも有意に少ない場合は「本研究 > 上瀬ら」と記載した。

1-2. 血液型ステレオタイプに対する態度尺度の因子分析結果

(a) 本研究における血液型ステレオタイプに対する態度尺度の因子構造と各下位尺度得点

血液型ステレオタイプに対する態度尺度について、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。この尺度は上瀬・松井(1996)によると因子数が4であったので、本研究においても因子数を4とした。固有値の減衰状況は、第1固有値から7.29、1.48、1.06、0.99、0.65であった。因子構造としては、上瀬・松井(1996)による因子構造の第2因子が、本研究では第1因子と第4因子に2項目ずつ分かれたものとなった以外は、概ね上瀬・松井(1996)によるものと同じものとなった（Table 1 参照）。信頼性係数は $\alpha = .73 \sim .87$ であった。従って、上瀬・松井(1996)の因子構造と同様の項目の得点を合計し、各下位尺度得点とした。

各下位尺度得点について、性差が見られるかどうかを t 検定を行い検討した。その結果（Table 2 参照）、「自己理解」、「信念強度」、「行動調整」下位尺度について有意差が見られた（順に $t(221) = -3.33, p < .001, t(220) = -2.56, p < .05, t(225) = -2.04, p < .05$ ）。いずれも女性の方が男性よりも有意に得点が高い結果となった。

Table 2 講義前(第1時点)における血液型ステレオタイプに対する態度各下位尺度得点の男女差 (t 検定結果)

	男性		女性		t 値	有意水準
	平均値	SD	平均値	SD		
自己理解	9.94	(4.25)	11.78	(3.96)	-3.33 ***	男<女
娯楽・関係促進	12.29	(3.94)	12.81	(3.52)	-1.02	
信念強度	8.48	(3.04)	9.50	(2.82)	-2.56 *	男<女
行動調整	8.04	(3.98)	9.08	(3.67)	-2.04 *	男<女

注. ***: $p < .001, *$: $p < .05$

(b) 本研究の結果と上瀬・松井(1996)による結果の比較

本研究における各下位尺度得点と上瀬・松井(1996)による下位尺度得点の比較を行うために、両者間に有意差が見られるかどうかを t 検定を行い検討した。その結果（Table 3 参照）、「自己

Table 3 血液型ステレオタイプに対する態度尺度各下位尺度得点について本研究と上瀬ら(1996)間の t 検定結果

	上瀬ら(1996)			本研究			t 値	有意水準
	平均値	SD	N	平均値	SD	N		
信念強度	6.8	(2.66)	95	9.06	(2.95)	222	6.52 **	本研究>上瀬ら
自己理解	6.7	(2.92)	95	11.00	(4.18)	223	9.07 **	本研究>上瀬ら
娯楽・関係促進	13.8	(3.65)	95	12.59	(3.71)	224	2.67 **	本研究<上瀬ら
行動調整	7.4	(3.43)	95	8.64	(3.83)	227	2.70 **	本研究>上瀬ら
信念強度(講義後)	4.0	(2.62)	95	8.03	(3.23)	216	10.68 **	本研究>上瀬ら

注. **: $p < .01$

理解」、「信念強度」、「行動調整」、「娯楽・関係促進」下位尺度得点すべてにおいて有意差が見られた（順に $t(316)=9.07$, $t(315)=6.52$, $t(320)=2.70$, $t(317)=2.67$, 全て $p<.01$ ）。また講義後（第2時点）における「信念強度」下位尺度得点についても有意差が見られた（ $t(309)=10.68$, $p<.01$ ）。そのうち、「娯楽・関係促進」下位尺度得点については、本研究における得点よりも上瀬・松井(1996)における得点の方が有意に高かったが、それ以外の下位尺度得点は全て本研究における下位尺度得点の方が上瀬・松井(1996)における下位尺度得点よりも有意に高い結果となった。

2. 講義後（第2時点）における結果

2-1. 血液型ステレオタイプに対する講義後態度の肯定率

(a) 本研究における全体の肯定率と性別による肯定率

血液型ステレオタイプに対する講義後態度尺度における各項目の肯定率を算出した（Table 4 参照）。ここでの肯定率とは、各項目において5段階中「4」と「5」に回答した人の全体に占める割合を示している。肯定率が半数を越えている項目は、「血液型と性格が関連ないと頭では分かっていても、なんとなく関連ありそうな気がする」（51.1%）、「血液型性格判断は面白ければそれでよい」（65.6%）の2項目であった。

また性による肯定率の相違を検討するために、性別の肯定率も算出した（Table 4 参照）。その結果、総じて女子の肯定率が男子よりも高いかもしくは同等の傾向が見られ、男子の肯定率が女子より高い項目は「血液型性格判断は遊びなのだから、心理学者がとやかく言うことではない」等の少数の項目にとどまった。

(b) 本研究の結果と上瀬・松井(1996)による結果の比較

本研究における肯定率と上瀬・松井(1996)による肯定率の比較を行うために、肯定率（%）を度数に置き換えて、各項目について、両研究における調査対象者の肯定した人の人数と否定した人の人数に関するカイ二乗検定を行った。まず、本研究における女子の肯定/否定の人数と、女子大学生のみを対象とした上瀬・松井(1996)による結果についてカイ二乗検定を行った。その結果（Table 4 参照）、14項目中9項目について有意差が見られた。本研究における肯定者が上瀬・松井(1996)の肯定者よりも多かったのは「血液型性格判断は科学で証明できない部分に真実がある」、「血液型と性格の関連については、もう少し自分で考えてから納得したい」、「これだけ血液型性格判断が普及しているのだからどこかに真実がある」の3項目であった。一方、本研究における肯定者が上瀬・松井(1996)の肯定者よりも少なかったのは「血液型性格判断は遊びなのだから、心理学者がとやかく言うことではない」、「血液型性格判断は有害なものとわかった」、「血液型性格判断を信じていたことがばからしく感じた」の3項目であった。

次に、本研究における男女込みの肯定/否定の人数と、上瀬・松井(1996)による結果についてカイ二乗検定を行った。その結果 (Table 4 参照)、14 項目中 7 項目について有意差が見られた。女子同士の比較の際に有意差の見られた項目と共通しているのは、そのうち 5 項目であった。「自分が血液型性格判断について信じていたのは、講義で否定された部分とは違う」、「今後は血液型性格判断を占いとして考える」の 2 項目については、本研究の肯定者が上瀬・松井(1996)よりも有意に少なかった。

2-2. 血液型ステレオタイプに対する講義後態度構造尺度の因子分析結果

血液型ステレオタイプに対する講義後態度構造尺度について、因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行った。この尺度は上瀬・松井(1996)によると因子数が 5 であったので、本研究においても因子数を 5 とした。固有値の減衰状況は、第 1 固有値から 3.96、1.66、1.36、1.05、1.00、.81 であった。因子構造としては、上瀬・松井(1996)による因子構造のうち 5 因子中 3 因子 (第 2、第 3、第 5 因子) については、本研究においても同様となったが、第 1 因子については本研究では第 1 因子と第 3 因子の 2 つの因子に分かれ、第 4 因子のうち 1 項目のみが第 5 因子となった (Table 4 参照)。本研究では上瀬・松井(1996)の尺度に含まれる項目のうち 6 項目を省いたことも、このような因子構造になったことと関連していると考えられる。信頼性係数は $\alpha = .37 \sim .70$ となった。2 つの因子の信頼性係数が低いが、因子に含まれる項目数が 2 項目と少ないこととも関連していると考えられるので、本研究では上瀬・松井(1996)の因子構造と同様の項目の得点を合計し、各下位尺度得点とした。

各下位尺度得点について、性差が見られるかどうかを t 検定を行い検討した。その結果 (Table 5 参照)、「不可知性」下位尺度得点と「経験的根拠」下位尺度得点において有意差が見られた ($t(212) = -2.36, p < .05, t(222) = -2.00, p < .05$)。いずれも女性の方が男性よりも有意に得点が高い結果となった。

Table 5 血液型ステレオタイプに対する講義後態度各下位尺度得点の男女差 (t 検定結果)

	全体		男子		女子		男女差の t 検定	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	t 値	有意水準
不可知性	8.03	(3.23)	10.99	(3.15)	11.97	(2.87)	-2.36 *	男 < 女
サブタイプ	10.92	(2.90)	10.64	(3.11)	11.12	(2.73)	-1.19	
経験的根拠	5.92	(2.18)	5.58	(2.21)	6.16	(2.13)	-2.00 *	男 < 女
遊び	6.76	(1.62)	6.67	(1.93)	6.83	(1.37)	-0.69	
意味づけ	4.30	(1.60)	4.16	(1.72)	4.40	(1.51)	-1.06	

注. *: $p < .05$

3.2 時点におけるステレオタイプの変容

本研究では、第1時点と第2時点において共通して、血液型ステレオタイプに対する態度尺度のうち「信念強度」下位尺度を尋ねている。そこで、時点に関して対応のある t 検定を行った。その結果 (Table 6 参照)、有意差が見られた ($t(210)=7.48, p<.001$)。第1時点における得点の方が第2時点における得点よりも有意に高い結果となった。

Table 6 信念強度下位尺度得点に関する講義前・講義後の対応のある t 検定結果

	平均値	SD	t 値	有意水準
講義前下位尺度得点	9.10	(2.96)	7.48 ***	講義前>講義後
講義後下位尺度得点	8.07	(3.24)		

注. ***: $p<.001$

またこの点について、性による違いが見られるかどうかを検討するために、性ごとに同様の分析を行った。その結果 (Table 7 参照)、男女ともに第1時点における得点の方が、第2時点における得点よりも有意に高い結果が見られた (男性は $t(87)=5.12, p<.001$ 、女性は $t(122)=5.48, p<.001$)。

Table 7 信念強度下位尺度得点に関する講義前・講義後の対応のある t 検定(男女別)

	男子				女子			
	平均値	SD	t 値	有意水準	平均値	SD	t 値	有意水準
講義前下位尺度得点	8.51	(3.05)	5.12 ***	講義前>講義後	9.52	(2.84)	5.48***	講義前>講義後
講義後下位尺度得点	7.49	(3.15)			8.49	(3.25)		

注. ***: $p<.001$

4. サブタイプ形成の影響

上瀬・松井(1996)では、血液型ステレオタイプに対する講義後態度構造尺度の第2因子「サブタイプ」形成の有無による、態度変容についての影響の相違を検討している。そこで本研究においても、サブタイプ形成の有無による態度変容の相違について検討する。上瀬・松井(1996)では第2因子に負荷量の高い3項目の得点の高低によって2分割していたが、本研究ではそのうち2項目(本研究において除外された1項目は、上瀬・松井(1996)において肯定率が2.9%と極端に低かったため、質問項目から除外された)の得点を単純加算し、サブタイプ形成の強度を測定する尺度得点とした。全調査対象者を「サブタイプ形成群(N=106)」「尺度得点が6点以上」と、「サブタイプ非形成群(N=109)」「尺度得点が5点以下」に2分割し、群別に血液型ステレオタイプに対する態度尺度における各下位尺度得点について、対応のある2要因分散分析(時点(2)×サブタイプ形成の有無(2))を行った。その結果 (Table 8)、交互作用が有意であった ($F(1,205)=6.34, p<.05$)。また時点、サブタイプ形成の有無両者の主効果も有意であった (順に $F(1,205)=56.66, p<.001, F(1,205)=32.25, p<.001$)。

Table 8 時点(信念強度下位尺度得点の講義前・講義後得点)×サブタイプ(サブタイプ形成の有無)の二要因分散分析結果

	SS	df	MS	F
サブタイプ	480.38	1	480.38	32.25 ***
誤差	3053.38	205	14.90	
時点	112.01	1	112.01	56.66 ***
サブタイプ×時点	12.54	1	12.54	6.34 *
誤差	405.31	205	1.98	
全体	4063.62	413		

注. ***: $p < .001$, *: $p < .05$

そこで、各要因の単純主効果を検討した。サブタイプの要因(形成・非形成)における時点の単純主効果の結果を見てみると、「サブタイプ非形成群」において時点の単純主効果が有意であった($F(1,205) = 50.21$, $p < .001$)。つまり、第1時点よりも第2時点の方が有意に得点が低かった。一方、「サブタイプ形成群」においても時点の単純主効果が有意であった($F(1,205) = 12.61$, $p < .001$)。つまり第1時点よりも第2時点の方が有意に得点が低かった。以上から「サブタイプ非形成群」のF値の方が大きく、「サブタイプ非形成群」の方が、時点における得点の上がり方が大きい、言い換えれば「サブタイプ非形成群」の方が講義内容による態度変容が大きいことがうかがえる(Figure 1)。

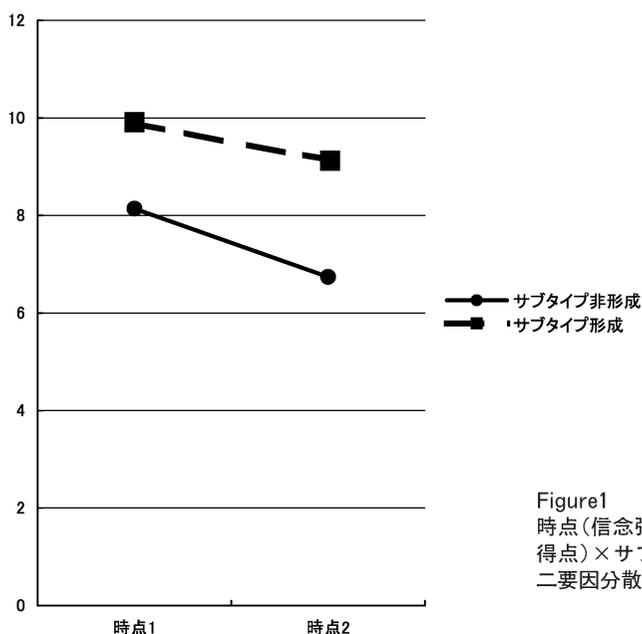


Figure1
時点(信念強度下位尺度得点の講義前・講義後得点)×サブタイプ(サブタイプ形成の有無)の二要因分散分析結果

また各時点におけるサブタイプ形成の有無の単純主効果の結果を見てみると、第1時点におけるサブタイプ形成の有無の間についての単純主効果が有意であった($F(1,205) = 21.21$, $p < .001$)。つまり、「サブタイプ形成群」の方が「サブタイプ非形成群」よりも有意に得点が高かった。一

方、第2時点におけるサブタイプ形成の有無の間についての単純主効果も有意であった ($F(1,205)=36.36, p<.001$)。つまり、「サブタイプ形成群」の方が「サブタイプ非形成群」よりも有意に得点が高かった。

さらに、第2時点におけるサブタイプの形成の有無による、第1時点の血液型ステレオタイプに対する態度尺度の各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果 (Table 9 参照)、すべての下位尺度について有意差が見られた (「自己理解」は $t(209)=-4.48, p<.001$, 「娯楽・関係促進」は $t(210)=-3.463, p<.001$, 「行動調整」は $t(213)=-3.73, p<.001$)。いずれもサブタイプ形成群の方がサブタイプ非形成群よりも有意に得点が高かった。

Table 9 サブタイプ形成の有無による講義前血液型ステレオタイプに対する態度尺度各下位尺度得点の t 検定結果

	サブタイプ非形成			サブタイプ形成			t 値	有意水準
	N	平均値	SD	N	平均値	SD		
自己理解	104	9.71	(3.90)	107	12.16	(4.04)	-4.48 ***	形成>非形成
娯楽・関係促進	104	11.66	(3.73)	108	13.36	(3.40)	-3.46 ***	形成>非形成
行動調整	106	7.60	(2.90)	109	9.46	(4.25)	-3.73 ***	形成>非形成

注. ***: $p<.001$

考 察

1. 講義前 (第1時点) における結果

本研究の結果、血液型性格判断について好意的な捉え方をしている男女大学生が半数を越えていることが示された。また全般的に男性よりも女性の方が血液型性格判断について、自己理解や行動調整、血液型性格判断を信用している傾向がより強いことが示された。

また、上瀬・松井(1996)による結果と比較してみると、「自己理解」や「行動調整」、「信念強度」尺度得点については上瀬ら(1996)よりも得点が高かった。一方、「娯楽・関係促進」については本研究における得点の方が上瀬ら(1996)よりも低かった。本研究における (男女込みの) 傾向として、血液型性格判断を「楽しみ」や「個人的な興味の範囲内」、「コミュニケーションを円滑にする道具」として利用するよりも、自己理解や他者理解のための道具として利用する傾向が上瀬ら(1996)における調査対象者よりも多いことがうかがえる。またその傾向は、本研究の結果により、男性よりも女性の方がより強いことも示された。男性にとっての血液型性格判断は、それを信頼するか否か、自己理解に役に立つかどうかという観点は女性よりも「冷めて」おり、娯楽として見ている傾向があると考えられる。

そしてこのような傾向は、上瀬ら(1996)の調査が行われた時代よりも、2008年現在のこの時代の方が血液型性格判断に関する情報がテレビ・雑誌・書籍等でより多く見られ、一般の大学生

により身近なものとして「浸透」しているあらわれかもしれない。2004年から2005年にかけてはTV番組において血液型を扱う番組が急増し、BPO（放送倫理・番組向上機構）青少年委員会が2004年12月8日、「血液型を扱う番組」について、放送各局に対し、「時局の番組基準を遵守し、血液型によって人間の性格が規定されるという味方を助長することのないよう要望」している。しかし、この要望が出されるより前の時期に、本研究における調査対象者は数多くの血液型を扱う番組に触れていた可能性が高い。また2007年から2008年にかけて、血液型別に性格を示した書籍がベストセラーとなっている状況もある。例えば「B型自分の説明書」（2007年発行）はアマゾン（Amazon.co.jp）において2008年9月11日現在54位、「A型自分の説明書」（2008年4月発行）は同63位、「AB型自分の説明書」（2008年6月発行）は同104位、「O型自分の説明書」（2008年8月発行）は同12位となっている。本研究の実施時期は2008年5月下旬であり、上記の4冊の本のうち2冊は発行済みで、調査対象者によるレポートの中にもこの書籍に触れている者が見られた。このような状況のなかで、現在の大学生が以前よりも血液型性格判断についてより肯定的な味方をするような時代的な背景が存在していることが、本研究の結果にあらわれたと考えられる。

2. 講義後（第2時点）における結果

講義後における本研究の結果では、「不可知性」・「経験的根拠」について女性の得点の方が男性よりも有意に高かった。血液型性格判断を科学では証明できない部分に信じる部分を期待したり、「(それでも)なんとなく関連ありそう」という形の態度変容への「抵抗」が、男性よりも女性に見られることが示された。

また本研究における結果と上瀬ら(1996)における結果の比較からは、「血液型は科学で証明できない部分に真実がある」、「血液型と性格の関連については、もう少し自分で考えてから納得したい」、「これだけ血液型性格判断が普及しているのだからどこかに真実がある」といった項目において、本研究における女子の方が有意に肯定率が高かったが、本研究における調査対象者の方が、講義において否定された血液型性格判断と、自分自身の今まで持っていた信念や経験との間の「すり合わせ」を即座に行うことができない状況が結果にあらわれていると考えられる。本研究における調査対象者の講義後の小レポートにおいて科学で証明できない部分に真実を求めるようなコメントとして、「もともとは信じていなかったのですが、血液型は今の科学の力では解明できるものではないと思います。なので、血液型と性格が全く関係ないとは言いきれません。信じてないといっても、今言われている血液型性格判断を信じてないだけです（男性）」、「理屈じゃない不思議さを血液型の分類に感じる人が多い（男性）」といった記述が見られた。また自分の中で納得してから考えを整理したいといったコメントとしては、「考えが変わった。血液型と性格は関連のあるものだと思っていたが、そうではないといわれ、わからなくなってしまった。

またじっくり考えることが必要だと思った（女性）」という記述が見られた。さらに血液型性格判断が普及しているという所に信じる根拠を求めるコメントして、「これだけ血液型占いなどが広がっているので、科学で証明できないような部分をもっと知りたいと思いました（女性）」、「テレビで実験をしたりして、きれいに血液型別に分かれたりするのを見ると、0.1%くらいは証明できない部分もあるのではないかと思った（男性）」といった記述が見られた。講義によって動揺が見られはするものの、自分の中で矛盾するような考えが同時に成立していたり、「不思議さ」やほんの少しは信じたいという思いが払拭できない様子がレポート内容からうかがえる。

そして「意味づけ」尺度得点において、本研究における肯定率の方が上瀬ら(1996)によるものよりも低かったという結果は、本研究における講義内容の中に、上瀬ら(1996)では含まれていた「血液型ステレオタイプにおける差別的な現状」を含まなかったことが影響したと考えられる。

3. 2時点におけるステレオタイプの変容

本研究の結果からは、「信念強度」について2時点における得点の有意な低下が示された。上瀬・松井(1996)においても、同様の2時点において、「信念強度」得点の有意な低下が示されている。これにより、女性だけでなく男性を含めた大学生においても、上瀬・松井(1996)の指摘するように、この種のステレオタイプ（例：「血液型によって性格は異なる」）を低下させることに講義が有効であったことが示された。また上瀬・松井(1996)では講義から3ヶ月後にも同様の調査を行っており、第2時点の得点に比べてやや元に戻る傾向が見られたが、第1時点の得点に比べて依然低い得点を保っていることが見いだされている。本研究では第3時点の調査は行っていないが、上瀬・松井(1996)と同様の傾向が見られることが期待される。

4. サブタイプ形成の影響

本研究では、講義後（第2時点）において、講義で伝達した反ステレオタイプ情報を、サブタイプとして処理する傾向を示す「サブタイプ形成」がより見られた者は、そうでない「サブタイプ非形成群」に比べて、第1時点における段階で既に血液型ステレオタイプに対する態度の得点が総じて高かった。この結果は上瀬・松井(1996)と同様の結果であった。またこれは講義後のサブタイプ形成が、上瀬・松井(1996)の指摘する「ステレオタイプ維持機能を持つ認知活動」として働いていることを示していると考えられる。つまり、講義において自身の持つステレオタイプに反する情報に接触したことによる一種の抵抗—態度変容を劇的に変容させない一種の折り合いのつけ方—が、サブタイプ形成という働きによって見られていると考えられる。

さらに上瀬・松井(1996)の分析には見られなかったが、本研究では、サブタイプ非形成群の方がサブタイプ形成群よりも講義後の「信念強度」得点の上がり方が大きい結果となった。この結果は、1回の講義の前後という短期間であっても、サブタイプの形成の有無によるステレオタイ

ブ変容への影響の仕方が異なっている、つまりサブタイプ形成によってステレオタイプ維持機能が短期間であっても働いているということを示している。しかし、サブタイプ形成群・非形成群ともに講義後の「信念強度」得点は有意に下がっており、少なくともこの種の講義を行わないよりも行なった方が、血液型ステレオタイプに対する態度変容は見られることが示唆される。

5. 本研究の問題点と今後の課題

本研究においては、一回の講義の前後のみについて、調査対象者に心理尺度に回答を求めた。上瀬ら(1996)のように、同じ調査対象者に対して数ヵ月後に同じ心理尺度に回答を求め、長期的な態度変容についても検討することが課題として残された。第2に、本研究における講義内容が、上瀬ら(1996)における講義内容よりも少ないものを展開したことが挙げられる。その結果、講義後の一部の尺度得点に影響が出たと考えられる。第3に、上瀬ら(1996)において使用した心理尺度以外のステレオタイプに関する項目を追加して尋ね、多面的な観点から血液型ステレオタイプについての考察を行うことを、今後の課題として検討する必要がある。

文献

- 榎淵めぐみ・斎田順子・坂元章 1999 血液型ステレオタイプの構造と認知の歪み—重複性の効果の検討
性格心理学研究, 7, 105-105.
- 松井豊 1991 血液型による性格の相違に関する統計的検討 立川短期大学紀要, 24, 51-54.
- 森津太子・徳井千里・山田紀代美・坂元章 1998 血液型ステレオタイプによる選択的な情報使用—坂本
(1995)の再検討 性格心理学研究, 6, 154-156.
- 大村政男 1990 血液型と性格 福村出版
- 佐藤達哉 1997 第2章 血液型性格判断ブーム：その問題点と歴史的展開 (Pp.37-60) 菊池聡・木下孝
治(編) 1997 不思議現象 子どもの心と教育 北大路出版
- 佐藤達哉・渡邊芳之 1995 古川竹二の血液型気質相関説の成立を巡って—大正末期～昭和初期におけるあ
る気質論の成立背景 性格心理学研究, 3, 51-65.
- 渋谷昌三・小野寺敦子 2006 手にとるように心理学がわかる本 かんき出版
- 詫摩武俊・松井豊 1985 血液型ステレオタイプについて 東京都立大学人文学部人文学報, 172, 15-30.
- 上瀬由美子・松井豊 1996 血液型ステレオタイプの変容の形—ステレオタイプ変容モデルの検証— 社会
心理学研究, 11, 170-179.